

## 「左翼」という価値!?

### ♪映画『鬼畜大宴会』と現実の相関性

#### フィクションという実在

渋谷の街並みが淀んでいた。暗い部屋から出てきたからだけではなかった。頭をハンマーでなぐられたような衝撃を受けたのだ。

映画における暴力や性描写には慣れていると思っていた。しょせんは作り物だろう、なんて考えたのが甘かっただ。

しかしあの映画を見た後で、ラーメン屋に入ろうなんて言うBは、涼しい顔をして「何かあったの、暗い顔して」だって。人の気も知らずに、こんな時にラーメンなんて食えるかってんだ。

「何かって、君は何も感じないのか?」

僕が切り出すと、無関心にも平気な顔でラーメンを食いながら、「これ、さっきの臓物に似てるね。」

なんて奴だ、吐き気がしてきた…。

実はこれには訳がある。昨日の事だ。珍しくBが「今渋谷で面白い映画をやつてる」なんて言うんだ。

きっと奴のことだから、ロードショーにも引っ掛からないようなマイナーな映画なんだろう、とは思いながらも「どんな映画なんだい」と、ついつい切り出してしまった。

その瞬間、しめた！とばかりにBはしゃべりだす。もう誰にも彼を止められない。奴の性格は知っていた筈だった。無類の饒舌であること、他人の意見を全く聞かないこと、そして何よりも自分が絶対に正しいと思っていること。

おかげで、この映画が「左翼」の映画であり、七〇年代、連合赤軍の「リンチ殺人」を題材に、二十代の若手監督が作った作品であることが、映画を見る前から既に解ってしまっていた。

この前だつてそうだ。Bは『スクリーム』だったか知らないが、スリラー映画を一人で見てきて、観るのを楽しみにしていたCを前に、内容をべらべら話すんだ。

その時は笑つて頷いていたCも、トイレの前でそれ違つた時、涙を浮かべていた。よほど映画の犯人が解つた事が辛かつたんだろう。

そんな訳で、話しを聞いてしまった以上、観る以外に選択肢を失つた僕は、半ば強引に、渋谷の待ち合わせ場所へと向かった。

しかし、思つたとおり、Bは来ていなかつた。奴が時間通りに来た試しは、一度として無いのだ。

結局三十分以上も待つた揚げ句、「電車が遅れちゃつて…」などと、わかりきつたBの言い訳を聞き流して、僕らは映画館へ。

それにしても、よくしゃべる奴だ。「このCMはつまらない」とか「この予告編は出色の出来だ！」なんて、い

ちいい説明してくれるもんだから、回りの人が僕をじろじろ見る。恥ずかしいたらありやしない。

映画本編が始まつて、さすがに静かになつたが、このままBがしゃべつたらぶん殴つてやろうと、本氣で思つていた。

## リアリティーなき現実

さて、映画はあるアパートの一室にある“アジト”が舞台だ。数人の男女が「ある目的」に向け、共同生活をしている。

リーダー格の雅美は、誰かれ構わず自分の欲望の“はけ口”にしながら、郵便局の襲撃やら、武器の調達やらを仲間にやらせている。

獄中に居るカリスマ、相澤の威光のためか、恋人・雅美には、みんな逆らえないのだ。

ものすごく封建的な、上位下達の関係もきることながら、アジト内での討論はいつも希薄で惰性的だ。これじゃ仲間意識なんて持てないだろう。

そもそも、いつたい何を目指すのかと聞きたくなるような、すさんだ組織には、ほんとウンザリする。せめて

ものの救いは、ギター好きの素朴な青年・熊谷と、新入りの杉原の交流ぐらいだろう。

そこには、山根という古参のメンバーが現れ、彼なりの粗暴な論理で雅美（と、その背後の相澤）を批判した

ことから、メンバー相互の軋轢が深まっていく。

そして、出所を前にした相澤の孤独な死。こうして組織は解体され、鬼畜の宴へと暴走していく…。

映画の後半はもう、表現することすらおぞましい、狂氣の世界だ。

鮮血が飛び散り、内蔵がまさぐられる修羅場の中、ふと隣を見ると、さもおかしそうにBが笑っているではないか。前半のドラマ部分では、いびきさえかきながら、寝ていた奴があるのである。

そして、冒頭の会話。

Bはスプラッター系でも観る感覺なんだろうか。それだったら、わざわざ渋谷まで来なくても、商店外のビデオ屋で『死靈のいけにえ』や『ゾンビ』でも借りてくれれば、済むことだろう。

「なぜこの映画が面白いんだ。」と聞くと、「君が杉原みたいだからだよ。」と思つてもみない答えが返ってきた。どうも、映画と僕の反応を観察していたらしい。

### リアリティーというフィクション

杉原といえば、さつきも言つたように、『アジト』の中では新入りで、熊谷の人柄に引かれて組織に結集した男だ。

映画では、役割的に「傍観者」の杉原なのだが、山根殺害以降の殺伐とした関係性の中で、次第に人格が

崩壊し、信頼していたはずの熊谷をリンチするのだ。

「なんであんな男が僕なんだよ。」と言ふと「杉原がなぜ“鬼畜”になったのかを考えなよ。」と言うBの言葉に、僕は考え込んでしまった。

「いいかい、君はね、あるべき現実からこの映画を観て“おぞましい”とか言つてゐるんだよ。フィクションはフィクション、現実は現実として考えなきや。」

「そうは言つても、題材が題材だけに、『赤軍問題の総括』を主体的に捉え返して…。」

「おいA、何を言つてゐるのか、話が支離滅裂だぞ。だから君は杉原みたいななんじやないか。」ああ、またBの“アレ”が始まってしまった…。

Bは、僕のラーメンが伸びきつているのを、知つてゐるのか、なおもしゃべり続ける。といつても、ラーメンなんて始めから食べる気は無いけどね。

「相澤という絶対的真理の体現者を頂いて、あの組織は成り立つていたわけだよな。相澤が居なくなるってことは、つまり座標軸を失うって事じやないか。」

ちょうど、スターリンとロシア共産党の関係みたいな依存の構造であろう。Bの鼻息もますます荒くなつてくる。

「つまり集団ヒステリ一つて構造さ。誰もが出口を見失い、パニックに陥つていく。まさに悲劇だね。」声を荒らげるBに、周囲のお客も引きがちだ。

そして、ハイテンションのBは、なおもしゃべり続ける。「そうした発想が問題なんだよ。杉原も君も、理性的に完全な組織を前提にしているから、現実が歪んだものに見えるんだ。倫理を社会に投射したって、意味が無いだろ。」

「左翼」という価値 !?

まあ、その通りなんだけど、ラーメン屋で何時間も政治談義している、君の感性も相当問題だと思うよ。うん。

そのうち、当然と言えば当然だが、神妙な顔で近づいてきた店員に促されて、僕らは店を出た。九月の渋谷の街は淀んだ海のようだった。僕らは座標軸を失った難破船のように街をさまよっていた。駅はどっちなんだろう。

注.. 本編はフィクションであり、登場する人物その他は、特別の思い入れこそあれ、すべて想像の産物です。

